

There Are No Little Things ー長期安定の神様は細部に宿るー

浅井矯正歯科（岐阜市）

浅井保彦



- 1969 大阪大学歯学部卒業
- 1973 大阪大学大学院歯学研究科修了（歯学博士）
- 1974 松本歯科大学助教授（歯科矯正学）
- 1979 医）浅井矯正歯科開設（岐阜市）
- 2011 公）日本臨床矯正歯科医会会長

日本矯正歯科学会認定医、指導医、臨床指導医

台湾口腔矯正医学会（TOS）国外荣誉会員

E. H. Angle Society of Orthodontists 正会員（米国）

M Ortho RCSEd（英国）

北京大学客座副教授（中国）

メキシコ州立自治大学客員教授（Mexico, Toluca）

共訳本：矯正治療後の咬合の安定性と保定、医歯薬出版

（Retention and Stability in Orthodontics, W.B. Saunders）

1990年1月極寒のコネチカット州 Hartford に矯正歯科臨床医と研究者が集い、著名な12名の講師による治療結果の長期安定性の強化方法あるいは限界についての講演を聴き、熱心な討論を行った。そのシンポジウムの結果が、この分野でのおそらく初めての

のまとまった著書¹⁾として出版された。その後相当な年月が流れた2017年になって今

度は世界9か国30人の著者によって新たに安定性、保定、再発をテーマにした著書²⁾

が発行されている。本題に入る前に、この二つの著書を比較してみることによって、過

去 30 年ほどの間に長期安定性について我々はどこまで知見を増やし技術を高めたのか、新たに出現した課題は何なのかなどを考えてみたい。昨年立ち上がった本研究会の将来展望を描く際に何かヒントが生まれることを期待しつつ。

本日の講演のタイトルは Alexander の著書^{3,4)}の中に見つけた言葉を使わせていただいた。今回、講演の機会を与えられたことを機に自分の臨床を振り返り、特に術後の安定性のために心掛けている細かな事柄に焦点を当てて見直してみることにした。

その結果をもとに；

- 1) 矯正治療後長期間経過した症例が示す教訓
- 2) 安定した治療結果を目指して日常臨床において留意している事柄
- 3) 自院で使用している保定装置
- 4) 上顎前歯部における Bonded lingual retainer (BLR) の有効性
- 5) 矯正治療と下顎歯列の変化
- 6) 後戻り傾向が小さな不正咬合と大きな不正咬合
- 7) 歯列が再び乱れてきた症例をどう扱うか

の順に、私自身が実施し、体験している現状について率直にお話をさせていただこうと思う。

また最後に、長期保定戦略として多用される fixed retainer にも思わぬ落とし穴があるとの報告⁵⁾が散見されるので、当院にて遭遇した一症例を供覧し、その原因についての考察とリカバリー治療の経験をお話しして、皆様の議論のきっかけに資することができれば幸いである。

<参考文献>

- 1) Retention and Stability in Orthodontics, W.B. Saunders Co. 1993
(日本語版：矯正治療後の咬合の安定性と保定、医歯薬出版)
- 2) Stability, Retention, Relapse in Orthodontics, Quintessence Publishing Co. Ltd. 2017
- 3) The 20 Principles of the Alexander Discipline, Quintessence Publishing Co. Ltd. 2008 (日本語版：アレキサンダーディシプリン 20 の原則、クインテッセンス出版 2012)
- 4) The Alexander Discipline Long-Term Stability, Quintessence Publishing Co. Ltd.

2011 (日本語版：アレキサンダーディシプリン 長期安定性、クインテッセンス出版
2013)

- 5) Arqub SA, Al-Monghrabi D et al., The dark side of fixed retainers: Case series.
Am J Orthod Dentofacial Orthop 2023; 164: e72-88